

9. 小諸宿の町並み・建物・物語りを活かした商都再生の試み

小諸・町並み研究会
(長野県小諸市)

1. 活動の背景と目的

小諸市は、北国街道小諸宿と城下町の歴史を有する人口約4万人の高原の町です。

明治期には、近郷の物流基地として栄え、「小諸商人」の名を県下に知らしめ、立派な商家の町並みを形成してきました。しかし近年、その繁栄の中心であった立派な商家の並ぶ旧街道沿いは衰退し、商業の中心は駅前通りに移行しました。その駅前商店街も現在は落ち込みが激しく、中心市街地の商業は危機的状況となってきています。

また小諸には、島崎藤村、高浜虚子を始めとする多くの芸術家が住まい、「千曲川旅情の詩」などの作品を残しています。

このような歴史性と詩情に富む風景や町並みを育て、活かすことを通して小諸の中心市街地の再生の道を探ろうと、平成10年に「小諸町並み研究会」が発足しました。

同じ年に、行政による「歴史的街路整備事業」「町並み環境整備事業」もスタートしましたが、行政の事業は基本的にはハードの整備を目的とするもので、町並みを育てるとか活用するという取り組みは含まれていませんでした。そこで、私たちの会では「町並み発見、学習」や「住民参加による施設計画」などのソフト部分に取り組み、行政とのパートナーシップでまちづくりを効果的に進めることを目指して活動してきました。

当会は、会則に次の3つの目標をかかげて活動を進めています。

1. 美しいまち

小諸市内の歴史的な町並みや建物、詩情ある風景を守り育て、自慢できる美しいまちづくりを進めます。

2. にぎわい

魅力ある景観や建物、小諸を描いた作品と作家、小諸を愛する創作者とのかかわりを財産として、独自の文化創造や発信、交流観光、にぎわいづくりを進めます。

3. 市民参加

小諸の各地区の歴史や自然を活かしたまちづくり活動の連携を図り、行政・企業（商業者）とのパートナーシップによる、参加のまちづくりを進めます。



本町のまちづくり拠点となっている
町屋館（旧笠原邸）
町並みミュージアムのスタート地点

II. 活動の内容

これまで3年間、ハウジングアンドコミュニティ財団の助成をいただき、活動をささえていただきました。

ここでは、まずこの3年間を簡単に振り返ってみたいと思います。

●1年目（平成11年度）

まだメンバーも少なかったので、まちづくりの裾野を広げるために地区ごとに「歩く会+町並み茶話会」や、まちづくりコンクールを行いました。

また、前年に行った旧笠原邸の活用提案づくりワークショップなどの保存運動が実り、市の事業で本町のまちづくり拠点に利用されることになりました。それを受けて、地区を支援する形で計画づくりワークショップを行い、市民参加で活用のイメージをまとめ、設計に反映させました。

●2年目（平成12年度）

「まず最初に、北国街道沿いの核となる、本町のまちづくりを盛り上げよう」という主旨のもとに、千葉大による本町の歴史的建物調査、専門家を交えてのデザインの学習会などを重ねていきました。

町屋館（旧笠原邸）のひろば部分ワークショップも行き、設計に反映させました。

また本町だけでなく、他の地区への種まき活動として、「歩く会」の主催やまちづくり提案などを行っていきました。

●3年目（平成13年度）

今年度はこれまでの活動の効果が形としてあらわれてきた年でした。

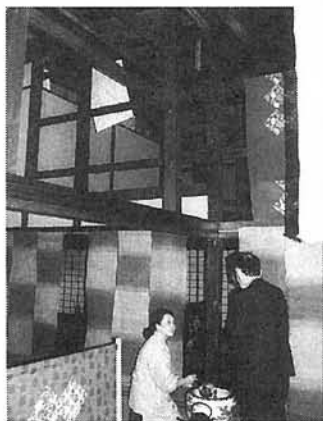
【NPO 法人化】

平成10年に会を設立してからの3年間で、わたしたちの会の活動に賛同する仲間が増え、また中心メンバーは会の必要性を強く感じるようになり、「NPO 法人としてきちんとした体制をつくろう」という話しができました。それについて昨年末から勉強会や検討を行い、13年の春にNPO 法人の申請を行いました。

法人化により行政がまちづくりパートナーとして重視してくれるようになったことも効果の一つですが、最大の効果は理事になったメンバーの会の運営に対する自覚が高まったことです。これまでは、ほとんど会の発起人であるプランナーが活動企画をたてていましたが、今年度は各理事からさまざまな発案がなされ、みんなで取り組むことができました。

【佐藤邸・保存活用支援 ～「はりこし亭」オープン】

町屋館に次いで、当会で保存活用支援をおこなったのが、西原の佐藤邸です。



保存活用支援を行った
「はりこし亭」内部

藍染めをおこなっていた大きな民家が壊されることになりましたが、当会の理事の経営する旅館（中棚荘）で引き取ってくれることになり、これも当会の理事である建築家が設計して立派な料理屋（はりこし亭）として再生しました。

会では、壊される前の民家のオープンハウスや記録づくりを行いました。

【建物調査、デザイン研究 ～「本町まちづくり読本」作成】

市の街環事業による修理修景事業が進むにしたいが、画一的でハリボテ式（素材が本物指向ではない）の修景ではなく、「小諸らしいデザイン」で「素材感の美しい」修景とは何かを、NPOとして提示していかななくてはいけないという気運が高まりました。

その盛り上がりの中で、今年度は次の活動を行いました。

①本町まちづくり読本の編集

千葉大の福川先生が、これまでの本町での調査のまとめとして、にぎわいのある暮らしやすい町並みを形成するために、伝統的なまちの空間構成と町屋のつくりを今後どのように建物プランやデザインに受けついでいけばいいかのガイドを提示してくれました。それに加えて、本町の協議会メンバーも参加してまちの歴史や景観ポイントの紹介をまとめ、冊子として出版しました。

②「小諸らしい」デザインの調査・研究

当会のメンバーの建築家が中心となり、伝統的建物のディテールの調査をおこないました。（これは、平成14年度に「修景ガイド」として発行するために現在も調査継続中です。）

またこのテーマで、信州の伝統的建物に詳しい吉沢先生をまねいて学習会をおこないました。

③千葉大による建物の実測調査およびに町並み図（屋根ぶせ図）の作成

今年度は、本町以外の建物に広げて実測調査を実施しました。また、地区ごとの特色を明らかにするために、昨年の本町の町並み図につづいて、今年度は与良町、荒町の町並み図を作成しました。

【「町並みミュージアム」の実施】

11月23日に、親子で本町周辺を歩いてもらうイベント「町並みミュージアム」として、次のような企画をたてました。

- ・歩いてなるほど町並み展（これのみ23日～25日の3日間）
- ・城下町・忍者クイズラリー
- ・ほんまち町屋館・思い出横町開店！（駄菓子屋、子ども商店街、食べ物屋、他）

町屋館を中心会場に、本町周辺全体をミュージアムにして、パネル展示や子ども向けラリーを行いました。忍者修行のスタ



本町まちづくり読本



千葉大学の实測調査

ンプで駄菓子屋で好きな駄菓子をもらえるという企画があたり、700人近い親子が町を歩きました。

忍者修行として、神社の石垣をのぼったり、そば屋でそば粉をひいたり、老人会の指導でしめ縄をなったりといったふだんはできない経験をしてもらえるようにしました。

子どもと一緒に歩いている保護者も、「町の歴史がよくわかっておもしろかった」「まちの中には、見どころがいっぱいあるんだね」と小諸の資源の再発見を楽しんでくれました。

また、それぞれの企画に新しい多様な人材が力を発揮してくれて、人の輪が大きく広がり、これまで調査研究などが主体であった会の活動の、新しい展開が見えてきたような気がします。

このイベントは、継続して行いたいと考えています。

このイベントは波及効果として、中学校が総合学習で町並みウォークラリーを行ったり、商工会議所のイベントで駄菓子屋を実施するなどの動きが出てきています。



町並みミュージアム 忍者ラリー
駄菓子屋にて



忍者ラリー しめ縄づくり修行



町並み展 (於：町屋館)



反省会

【個性を活かしたまちづくりの提言～各地区のまちづくりの支援】

これまで町並み研究会は、「本町を盛り上げて、他の地区に波及させる」ことを目指してきました。そのような働きかけもあって、本町は町屋館を中心にまちづくりの気運が盛り上がってきています。

そのような動きを他地区へも広げるために、今年度は千葉大学が荒町、与良の町並み調査を行い、その報告会を2地区に出向いておこないました。(この報告書は印刷し広く配布しました)

この2つの地区は、本町につづいて市の街環事業が動きだし、「何をやったらいいのか」と考えはじめた時期なので、どちらとも協議会が共催してたくさんの人を集めることができました。

特に与良地区では、当会として「瀬戸屋」(現在は空家)の調査を行い保存活用の働きかけを行ったこともあり、平成14年度は地区の有志でまず掃除を行おうという動きが出ています。

また、「本町まちづくり読本」のような冊子をつくりたいという希望をうかがっています。

Ⅲ. 活動の効果と今後の課題

今年度はメンバーそれぞれの努力で多様な活動が展開でき、イベントや冊子という目に見える形で広く市民にPRすることができました。

また、発会当初から関わり続けた「町屋館」が形となって立ち現れ、その運営に本気になる地区の方々が集い、まちづくりの核としてさまざまな人の活動の出会いが生まれたことは、大きな成果です。

4年前に数人で始めた当会も、今では多様な人材が集まり、各地区でのまちづくりの動きをつなぐ役割を担うまでになりました。

また、建築家などの専門家が中心となって仲間を巻き込みながらデザインマニュアルづくりに向けて動き出したことで、今後の保存、修景事業に大きな効果が期待できます。

このように私達なりにがんばった3年間ですが、まちの活性化という大きな視点で見ると、まだまだやっと始まったばかりの活動だと思えます。

今後は、これまでの活動の継続として、「小諸らしいデザイン調査」の取り組みを発展させて、専門家や職人のネットワークをつくり、歴史を活かした魅力的な店舗デザインへの取り組みや、伝統的な建築技術の継承しくみをつくる必要を感じています。

もう一方で、まちづくりの調査や提言、参加型イベントで掘り起こした裾野の上に実際の活性化につながる事業を展開する発想が必要だと思えます。

TMO（中心市街地活性化事業）などと連動して、NPOとして空家を借りて店づくりを行うとか、手作りの観光ツアーのコーディネートなどの事業も検討していきたいと思えます。

しかし、それにかかわる人材の確保という面で、まだ次の一歩を踏み出せずにいます。そのような仕事をおこし、人材の発掘と育成を行う必要がありますが、だれがそのような事業をコーディネートするのが問題となってきます。

ともあれこの3年間は、ハウジングアンドコミュニティ財団の助成金のおかげをもちまして、これまで活動を発展させることができたました。

ここにあらためて、深く感謝いたしたいと思えます。



千葉大学の発表会／荒町地区